

## Close Quarters の象徴性

吉村, 治郎  
九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

<https://doi.org/10.15017/197>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 16, pp.89-95, 1989-03-03. 九州大学医療技術短期大学部  
バージョン :  
権利関係 :



## Close Quarters の象徴性

吉村治郎\*

### The Symbolic Meaning of *Close Quarters*

Jiro Yoshimura

#### I

*Close Quarters* は一昨年の1987年に出版されたW. ゴールディングの最新作である。またこの作品は直ぐ前の作 *Rites of Passage* の続篇として書かれたと言う続き物の性格も持っている。従って、扱われている時代及び場所も同じであるばかりか、登場人物もほぼ全員、前作で顔馴染みの者ばかりである。ただ一つの例外と言え、Colley 牧師の姿がもはやないことだけである。彼は前作では自己苛責の重荷から非業の死を遂げたからである。しかし、彼の存在は *Close Quarters* においては今度は目に見えぬ形で、語り手 Talbot や召使い Wheeler などに影響を与える。時には二人の行動を陰に陽に規制し呪縛さえする無気味な力として存在している。

が、ともあれ、状況設定という点では、一二の例外を除けば、*Close Quarters* は前作の *Rites of Passage* と大差はない。しかし、観点を変えて、両作品におけるプロットの重みを比較して見ると、そこには自ら顕著な差異が認められる。

先行の *Rites of Passage* では Colley 牧師の罪と自殺という衝撃的な事件がプロットの中核をなしていたことは既に述べた。一方、続篇の *Close Quarters* では一転して、人物間の葛藤や和解及び決裂といった小説の常套手段とし

ての事件らしい事件は見あたらない。オーストラリア地方へ航海するイギリスの移民船であり、かつまたナポレオン支配下のフランス軍と戦う軍艦でもある帆船上で繰り広げられる様々な人物の生態や光景が語り手の Talbot によって航海日誌の形で述べられているに過ぎない。確かに、その間に、イギリス船 *Alcyone* 号との遭遇と別離、Talbot の束の間恋、さらには Wheeler の死と言った瑣末的な出来事は起こるが、いずれもスナッフショット的価値しかなく、小説全体を支配する程の重大な事件とはなり得ていない。いわば劇的展開を持つプロットが欠如した特異な小説となっている。こうした特異性は、例えば、*Lord of the Flies*, *The Spire* と言ったゴールディングの以前の作品と比較しても際立った対照をなす。勿論、この小説のプロット上の平板さは本年1989年で78歳という高齢にある作者ゴールディングの作家としての構想力の衰えのせいではない。なぜならば、この小説の特徴的平板さは構想力の貧弱さ故の破綻ではなく、予め計算づくで意識的に創り出されたものだからである。その証拠に作者は小説の冒頭部分で先手を打って、語り手の Talbot に予め断りを入れさせ、この航海日誌は前作とは違って、書くに足る事件も人物もない、<sup>(1)</sup>と言わせている。何気ないこの断り書きこそ、*Close Quarters* がプロットの面白さや奇想天外な筋の展開を主眼とする小説ではなく、

\*九州大学医療技術短期大学部一般教育

作者の意図は意外にもプロット以外の別の所にあることを暗に示唆したものである。

では、この特異な性格を持つ *Close Quarters* という作品の意図、延いては作者の意図はどこにあるのであろうか。この小論では、上に述べたプロットの意図的な稀薄さと言う特徴に注目することは勿論のこと、その他の顕著な特質をも検討することによって *Close Quarters* という小説の意図を解明してみたい。

## II

乗員の Deverell の義務怠慢がもとで帆船の命とも言うべき帆柱に大きな損傷を負った船は、それ以後、振子の原理によって一段と揺れが激しくなる。船は自力航行の自由を失い、一度は漸く脱出した赤道付近特有の「無風地帯」(“doldrum”)へと押し戻されてしまう。しかし、この「無風地帯」を抜け出したものの、船は再び風雨と大波に翻弄される。船は風と波のなすがままに前後左右、そして時には上下に大きく激しく揺れる。勿論、乗客達も激しい揺れに平気でいられる筈はなく、ある者は船酔いによる断続的な嘔吐の急襲に悩まされる。一方、船にはむっとするような悪臭がたち込め、終始 Talbot を苦しめる。不安定な足許、激しい震動による嘔吐、船全体に漂う猛烈な腐臭、こうしたものの執拗な連続がこの *Close Quarters* という小説全体の基調となっている。その間に船底に付着した無気味な藻が次第に重くなり船足を引っ張ることが度々言及される。勿論、それは最初から藻だとは明言されていない。後になって正体が藻らしきものと判明する。

さらに特徴的なことは、前作の *Rites of Passage* において非業の死を遂げた筈の Colley が依然として生身の人間に心理的支配力を持っていることである。Talbot も彼の支配下にある一人だが、Wheeler に至っては Colley の影に怯え、完全に呪縛状態にある。

船上のこうした状況が語り手の Talbot によって述べられていくのであるが、彼自身も度重なる頭への打撃や船酔いの鎮痛剤のために意識

もはっきりしない。船の激しい揺れも手伝って、時には夢と現の境を幾度も彷徨う。

以上が、*Close Quarters* という作品を終始一貫して支配している諸要素である。その他には、味方の Alcyone 号との出会いや Talbot と Chumley 嬢との一時的な恋などが挿話的にちりばめられているだけである。一見して、これと言った劇的なストーリーの流れもなく、ただ船の激しい揺れと乗客の疲労困憊、さらには船酔いによる嘔吐感だけが主役に見える奇妙な小説と言う観を呈する。

しかし、帆船の動きを追って次第に読み進んで行くにつれ、読者は不思議な経験をする。つまり、船が立往生と揺れを絶え間なく繰り返すに従って、作中に氾濫していた諸要素が次第に普通の日常的意味を失い、代わって新たな意味と陰影を帯びて追って来ることに気付く。その結果、読者は知らぬ間に、日常世界から連れ去られて、異常とも言える非日常的な無気味な世界へと拉致されるのである。

まず、帆船の恒常的な揺れが問題となる。普通に考えて、海上で船が揺れるのは当然の現象であり、その原因として、波や風雨が挙げられる。*Close Quarters* においても、最初は、船の揺れは波や風その他の外的自然条件による。しかし、この揺れが何度も繰返されるうちに、ただの揺れからただならぬ無気味な何かの存在を暗示する揺れへと変容する。それ故に、船の上に素足で立った Talbot は、下に何か得体の知れぬ暗黒の生き物が蠢いているのではないかという惧れを自らの足によって実感するのである。船の激しい揺れの中に自然の揺れとは異なる無気味な揺れを感じとった彼は次のようにその時の戦きを語る。

There was a strange feeling in my naked feet. It was true, good God, the planking was alive! There was a creeping and almost muscular movement! It was a realization even more disconcerting than the brutally uneven movement of the whole

ship as the waves passed under her.  
( p. 187)

この後、Talbot は召使いの Wheeler がボールに入れた水で身体を洗おうとする。しかし、その洗い方が異常なことは注意せねばならない。先程、船上で無気味な揺れを経験した彼は、さながら何か忌避すべき異形なものに触れてしまった汚れを洗い清めるかのような脅迫観念めいた熱意で身体を洗おうとする。そればかりか、自分の身体を清めることによって併せて船全体の汚れと狂乱状態を一掃したい欲望に駆られる。

嫌悪と脅迫観念と狼狽の入り混った彼の過剰な反応ぶりからも、船の揺れは言うに及ばず、船そのものも普通のものではなく、異常な何かを暗示するものであることは容易に想像ができる。

何気ない日常的な事件や事物を一見何気なく取り上げておいて、次第にそれらに超日常的な別の意味を持たせゆく手法は作者ゴールディングがよく使う常套手段である。例えば、彼の *The Spire* という作品はその典型的な例であろう。'spire' は教会に付属する建物としての「尖塔」ではあるが、主人公の Jocelin の心理的変遷とともに「尖塔」は単なる建物としての事物性を失って主人公自身の重層的な精神を象徴するものとなる。突き刺すばかりに天を指向する「尖塔」は、同じく聖なる天空を希求する主人公の宗教的憧憬をも象徴する。一方、それは天空への思いは切なるとはいえ、神ならぬ人間である限り、決して聖なるものは手にすることが出来ない人間存在たるものの宿命的悲哀を象徴するものとなっている。また時には彼自身の抑圧された性的欲望のシンボルともなる。事物に漸進的な意味の変容と深化を与えて独自の小説世界を構築していく、こうしたゴールディングの卓抜した手法を更に徹底させ、それのみで読ませようとした作品が他ならぬこの *Close Quarters* と言えるであろう。

ところで、先に *Close Quarters* の支配的要

素の一つとして船の揺れを取り上げ、その象徴的含意を探ったが、その他にも象徴性を帯びた要素がいくつも見当たる。例えば、いつ止むとも知れない船の揺れによる嘔吐感や、船全体を覆う強烈な腐臭、さらには、海の深みへ引きずり込む悪意か怨霊の如く人知れず増殖して次第に重みを増す船底の無気味な藻、昼夜を問わず、嵐と凧の区別なくあたりを彷徨する亡き Colley 牧師の霊的妖気等々。これらの諸要素は作品全体に亘って様々な形で何度も繰返されることによって次第に不吉な象徴的意味を獲得してゆく。つまり、Talbot を始めとする乗客を終始悩ます嘔吐感は単に病理上のそれではもはやなく、もしかすれば、人間存在そのものへの嘔吐感であるかも知れず、鼻を突く腐臭は外的なそれではなく、実は人間存在内部の未知の暗黒から発する異臭であるかも知れぬのである。そして、船底の藻はそのような嘔吐や腐臭の根源たる人間内部の宿命的腐敗を象徴しているかも知れないのである。こうした危惧の念に一層の信憑性を与えてくれるものは、Talbot を含めた乗客達が嘔吐や震盪を誘発する激しい揺れを経験した後、奇妙な変化を示すことである。例えば、最初は無口で孤独癖のあった気難し屋の Anderson 艦長さえ、揺れを経験した後は別人の如く将校 Benét の言いなりになる。明朗だった Summers もむつつり屋に変貌し、乗客の一人の Brocklebank は夫人のストッキングを紐代りにしてビーバー帽をとめるという奇行に出る。こうした事実は船の揺れが自然なものではなく、人間の精神を根底から覆す異次元の衝撃的な何かであることを示している。彼等はちょうど禁断の木の実を口にしたアダムとイヴの如く、経験してはならぬ揺れを経験し、見てはならぬ深淵をそれと気付かずに覗いてしまったのだ。その心許ない足どりはそれ故の心の動揺と戦慄そのものと見なして良いであろう。言うまでもなくこうした特殊な危惧の念を読者に喚起することによって作者の文学的メッセージを伝えることが小説 *Close Quarters* の狙いであり、またそこにこの小説の比類のない文学的価値が認

められる。

以上、作中に見られる顕著な技法の一つとして反復による効果を検討してきたが、もう一つ見逃すことのできない特徴がある。それはアリュージョンによる文学的効果である。作中では、船の揺れと揺れに原因する嘔吐及び震盪が主役をなしているが、同時に亡き Colley 牧師のことが何度も Talbot や Wheeler によって意識されている。特に Wheeler は彼の霊に取り憑かれている。Wheeler は一度嵐に遭った時、偶然船から海中に放り込まれるという危機を経験していた。それ以後彼は、海中への落下は偶然によるものとは信じず、目に見えぬ何者かの手によって海中へ引きずり込まれたと言う思いを拭いきれないでいた。悶死した Colley 牧師が水葬に付された直後でもあったので彼の疑念と恐怖は一層募っていた。彼は呪いにかかったかの如く最後にはピストル自殺する。しかも嘗て Colley がいた船室において。

一方、Wheeler の転落から自殺までの間、乗客達は先に述べたような不吉な揺れや腐臭によって半狂乱のパニック状態へと投げ込まれる。言わば、亡き Colley は船にとっては不吉の前兆であり呪いなのであった。David Nokes の指摘の通り、Colley は「ゴールドディングのアルバトロス」(“Golding’s albatross<sup>(2)</sup>”)としての役割を果たしていることは間違いない。‘albatross’ 即ち「アホウドリ」は S. T. Coleridge の *Ancient Mariner* において、風と悪天候の前兆とされ、またこれを殺すと不吉とされている鳥である。ゴールドディングはこれを踏まえ、Colley を不吉の鳥アホウドリとダブらせて登場させていることは間違いない。そして、小説の冒頭において、不吉の前兆であるアホウドリの役目を亡き Colley に仮託することによって、オーストラリアへ向かう船旅が単に地理上の旅ではなく、実は異次元の暗黒へ向かう不吉な旅路であることをも同時に示唆している。この推論の妥当性は小説の終末近くの場面を見れば明らかとなる。船足を速めるため船底についた藻を除去する作業を見守っていた Talbot は吃水

付近で、藻の中を巨大な怪物 Leviathan の頭らしきものが浮き沈みしているのを目撃するからである。

I saw with waking eyes down by the crazily unstable waterline something like the crown of a head pushing up through the weed. Someone screamed by my shoulder, a horrible, male scream. The thing rose, a waggonload of weed festooned round and over it. It was a head or a fist or the forearm of something wast as Leviathan. It rolled in the weed with the ship, lifted, sank, lifted again …… (p.257)

まるで巨大な生き物であるかの如く船足を引っぱり、海底へ引きずり込むばかりに重くなった藻らしき異物を取除くこの場面は嘗て水葬に付された Colley の遺体が船底から出てくるのではないかと疑わせる戦慄の場面であるが、Talbot が実際に見たと思っている Leviathan とは従来、「悪の権化」とされている架空の怪物である<sup>(3)</sup>。勿論、ここで「悪の権化」たる怪物 Leviathan を登場させたのは作者側の緻密な計算によるものである。つまり、船の激しい揺れの中に Talbot が戦きながら感知したあの異質な揺れと、揺れによる激しい嘔吐は実は他でもない、この悪の怪物 Leviathan の蠢動に原因するものだったのであり、吐気を催す腐臭もこの悪の怪物の激烈な体臭だったのである。そして、絶えざる震動と嘔吐と腐臭に満ちたこの船旅は悪の権化たる Leviathan と遭遇するための過程であったのだ。従って、ここでこの旅は実質的に内的完成を見るのである。オーストラリア地方へ向かうこの航海物語は、地理上のどの地にも到着しないままに、語り手 Talbot によって突然打ち切られ、あっけなく終わってしまう。なぜならば、たとえ外面上の物語はなんの結末もない未完のままであっても、内的旅は Leviathan と遭遇した時点で既に完了して

いるからである。

### III

坂本公延氏の著作『現代の黙示録』の中に載っている挿絵の中の一つに特に興味を惹く絵がある。「怪魚を釣るゴールディング」と題された絵がそれである。<sup>(4)</sup>内容は題名の通り、ゴールディングが大きくうねる無気味な大海の真只中で鯨とも Leviathan とも定かでない黒々とした巨大な怪物を釣り上げようとしている図であるが、*Close Quarters* という作品の意図を、例えば言葉でではなく寓意的な絵で表現するとすれば、ちょうどそのような図となるであろう。ではゴールディングが *Close Quarters* において釣り上げようとした Leviathan とはいかなる怪魚であろうか。ここではもう一步掘り下げて Leviathan なる怪魚の棲む世界とはいかなるものか考えてみることにする。

Leviathan は「悪の権化」としての象徴であったことは前述したが、この怪物と対をなすのが陸に棲むといわれる Behemoth である。そしてこの二つの怪物は一对となつて二元性を象徴するとされている。<sup>(5)</sup> 作中ではこの他に、Leviathan と Behemoth の例の如く一对になった言葉がいくつか意識的に使われている。例えば「前」と「後」、「上」と「下」、「右」と「左」といった方向感覚を示すものや、また明確な一对の言葉ではなくとも短いエピソードの積み重ねによるものもある。例えば、Talbot は船員の使う独特な海事用語を耳にする度に自分自身が陸人であることを強く意識させられる。また言葉の違いだけでなく、船員との身長の違いも何度か言及されている。これらは「陸」と「海」という対概念を形成している。勿論、対概念の一方である「陸」を「海」に対比することにより、Leviathan の宰領する悪の領域たる「海」を強調するのが作者の狙いである。

ところで、こうした対概念をなす言葉のうち、とりわけ「左」という言葉を作者は相当意識的に、しかも重要な意味をこめて使用している。

前作の *Rites of passage* においては自殺し

た Colley は「左舷」から水葬にされているが、

*Close Quarters* においても Talbot が悪の権化たる Leviathan を目撃した場所は船の「左舷」である。そればかりでなく、自殺の時のラッパ銃によって吹っ飛んだ Wheeler の脳味噌の一部が飛び込むのは Talbot の「右目」ではなく「左目」である。「左」への作者の執着はさらに続く。上記二作以外の小説においても予め計算の上、意図的に使い分けられている。例えば、*Darkness Visible* という小説の主人公 Matty を例にとりて見よう。Matty は幼い時ロンドンでドイツ軍の空襲に遭うが、一命は取りとめたものの顔にひどい火傷を負う。顔の「右半分」は災難を逸れたものの「左半分」は目以外殆ど原形を留めぬ程に焼け爛れてしまう。無論、頭髪も「左半分」が完全に失われてしまう。<sup>(6)</sup>

もう一つの小説 *The Spire* においても「左」は不吉の前兆として使われている。この作では教会付きの雑役夫である Pangall という人物が登場するが、彼はやがて尖塔の建設工事に来ていた異教の人夫達の手によって人柱にされてしまう。彼の死はその後、教会内で起こる様々な忌まわしい事件や擾乱の先駆けとなるところを見れば、Pangall は先に触れた Colley 牧師と同じく不吉の前兆とされる死したアホウドリと言えるのだが、場所こそ違え、彼もまた Matty に似て、「右足」ではなく「左足」が跛である。<sup>(7)</sup>

これによっても「左」に対するゴールディングの特殊な思い入れは明らかであろう。が、ともかく、いずれの場合も「左」には良い意味はなく不吉なもの、異常なものの印として使われている。因みにシンボル事典によれば、「右」は、精神性、理知、英知、吉運を象徴するのに対して、「左」は、後部、退化、異常性、下級の徳性、さらには邪霊の支配する所、という伝統的な含みがあるとされている。<sup>(8)</sup> おそらくゴールディングはそうした伝統的または因襲的意味を踏まえた上で「左」を意識的に使用しているのであろう。従って、悪の権化たる Leviathan は「右舷」においてではなく、邪霊の支配する

「左舷」においてその姿を現したのである。さて、このようにゴールドディング的意味での「右」と「左」を考えてみると、作中で意識的に用いられていた「陸」と「海」の対比の意味が明らかとなるであろう。言うまでもなく「右」と「左」と言う対比は、「陸」と「海」と言う対比と平行の関係にあり、「陸」は「右」の象徴する正常なる日常世界を、「海」は「左」の象徴する異常なる非日常世界をそれぞれ表している。

ところで、既述の如く、*Close Quarters*における船旅は外的にはオーストラリア地方へ向かう航海の体裁を取ってはいたものの、内的には悪の権化たる Leviathan との遭遇に到るまでの象徴的旅でもあった。それはまた、正常な世界から異常な世界への航海だと言い換えることも出来るだろう。そして今、上述の対比的言葉を使って表現するならば、その旅は「右」の世界から「左」の世界への航海であったとも言えるであろう。その意味で、航海の途上で語り手の Talbot が経験する次の出来事は大変象徴的である。

Talbot は最初、「左舷」の船室にいたが、偶然のはずみで、亡き Colley がいた「右舷」の船室に移り住むことになる。暫くそこで暮らすうちに奇妙な経験をする。突然、自分が不吉な「左利き」であったことを発見したような錯覚に襲われる。本来彼は「右利き」なのだが、「左舷」にあった以前の船室とは違って何もかも正反対の造りになっている「右舷」の船室がちょうど全てを逆に映す鏡の如き役割をしたからである。今までは「右利き」と信じていた者が偶然、思ってもいなかった己れの「左利き」と遭遇するというこの一見何気ない経験は、まさに己れの内なる悪 Leviathan と遭遇する内的航海そのものと言えるであろうし、同時にそれはまた、オーストラリア地方へ向かう航海の象徴的意味を前もって示唆するものとも言えよう。

#### IV

*Close Quarters* はゴールドディングの他の

小説と同じく原罪としての人間の「悪」の追求と剔抉を主眼とした小説である。しかし、手法的には他の小説群とは大変異なっていた。他の小説は人物間の葛藤や様々な事件の描写を通して「悪」を具体的に提示する。従って、そこには、主人公となる人物が存在し、首尾一貫した劇的事件が起こるのが常である。しかし、*Close Quarters* の場合はそのような小説常識は通用しない。この小説においては、これと言った事件らしい事件もなく、人物間の葛藤も和合もない。そればかりか人物の造形描写という点では、どの人物も平板で生きた人物としての魅力に乏しい。こうした小説条件がない代わりに大海の真只中で嵐と波に翻弄される船の激しい「揺れ」があり、揺れによる絶え間ない「嘔吐感」があり、船全体を包む猛烈な「腐臭」の責苦があるばかりであった。いわば *Close Quarters* は人物や事件が主役ではなく、船の「揺れ」や絶えざる「嘔吐」、そして「腐臭」などが主役を演ずる特異な小説である。またその他に、「右」と「左」、「陸」と「海」などの言葉も象徴的役割を担っていたことは既に述べた通りであるが、ゴールドディングはそれらの非人間的要素に徐々に本来の日常的意味とは違う異次元の象徴的意味を付与することによって「悪」の存在を暗示していた。その意味で、*Close Quarters* は人物や事件よりもむしろ作家の命とも言べき言葉そのものの意味の変容と深化を劇化した「言葉の劇」と言ってもよいであろう。<sup>(9)</sup>

但し、そのためか、本来のテーマである「悪」そのものの具体的提示は見られず、その存在を暗示的に示すに留まっている。人物や事件が主役ではなく、「揺れ」や「嘔吐」に代表される非人間的要素が主役なのでそれは止むを得ない仕儀かも知れない。とは言え、手法の独自性という点では、彼の他の小説群とは大変異なった稀有の作と言えようし、そこにこの小説の真骨頂が認められる。しかし、技法上の新奇さやテーマ上の哲学的深みはある一方、小説芸術としての完成度、及び読者に与える文学的インパクトの質と度合という点では安易に第一級の作と

吉 村 治 郎

する訳にはいかない。いずれにしろ、人物の織りなす人間模様主体の小説に馴れ親しんで来た読者の心を捉える劇的魅力に今一つ乏しいと言う憾みを拭いきれないのは確かである。

<注>

- (1) William Golding, *Close Quarters* (London : Faber and Faber, 1987), pp. 6 - 8.  
以下本書からの引用はこの版によるものとし、引用後の括弧内に頁数のみ示す。
- (2) David Nokes, "Metaphysical Voyagers," *TLS*, ( June 1987)
- (3) アト・ド・フリース, 『イメージ・シンボル事典』 山下圭一郎他訳 (東京:大修館書店, 1987), p. 393
- (4) 坂本公延, 『現代の黙示録』 (東京:研究社, 1983), p. 157
- (5) アト・ド・フリース, p. 393
- (6) William Golding, *Darkness Visible* (1979 ; rpt. London : Faber and Faber, 1988), p. 14
- (7) William Golding, *The Spire* (1964 ; rpt. London : Faber and Faber, 1986 ), p. 14.
- (8) アト・ド・フリース, p.525.
- (9) Rosemary Ashton, "Becalmed," *The Listener*, ( June 1987)